

けいざい+

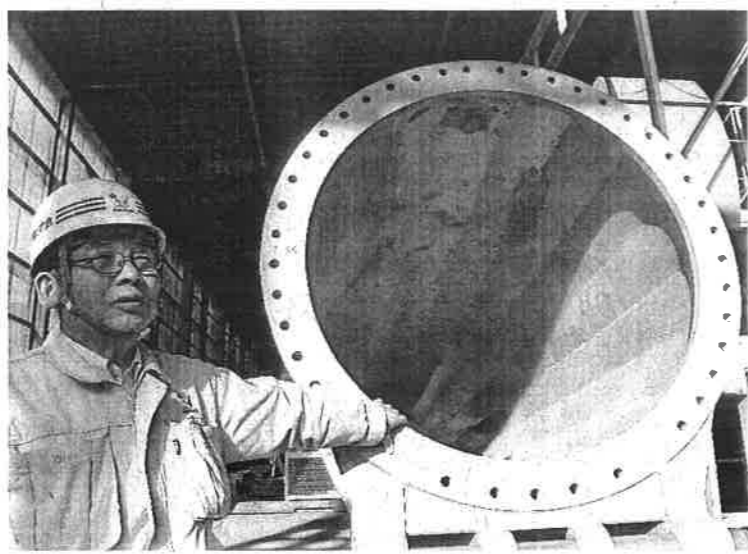
脱原発町工場の賭け

バチバチバチ。激しい音とともに、高さ2・5メートルの鉄の塊から火花が噴き出す。溶接によって形づくられているのは、高さ40メートルの風力発電の支柱のつべんに置かれる機械室。溶接作業で生じる誤差は数ミリもない。

自然の風を電気にかえる風力発電。東京電力福島第一原発事故後、新たな電力源として注目を集めた。風車を支える柱は上にいくほど細くなる円錐形。製造には精密な溶接技術が必要とされる。福島県いわき市の金属加工会社「会川鉄工」社長の会川文雄(69)は「我々、町工場は大企業ができないことで飯を食ってきた」と胸を張る。

東日本大震災後、福島県郡山市にできた国の研究機関向けに高さ40メートルの風力発電の支柱をつくった。「うちならできる」。手応えをつかみ、昨年10月、いわき市内の工業団地に支柱製造

震災で風力注目 溶接の技結集



支柱には「職人の技術が詰まっている」と語る会川文雄さん＝福島県いわき市

の工場建設に踏み切った。工場への投資額は年間売上高を上回る10億円。従業員40人の町工場には「賭け」。だが、迷いはない。「もう、原発に頼らない。大企業に経営を左右されたくない」。震災と原発事故の前、会川鉄工の商売を支えたのは、各地の発電所だった。売上の8割を占めていた。福島第一原発にも、放射性廃棄物を密閉し保管する「遮蔽容器」を納入していた。終戦翌年の1946年に父が創業。常磐炭鉱で石炭を運ぶトロツコの車輪を作っていた。エネルギー革命の末、地元の常磐炭鉱は76

年に閉山。東京の勤め先から呼び戻された会川は、億単位の借金にあえぎつつ、地元でできた火力発電所や石油精製所向けにタンクなどを納めてしのいだ。それが原発関連の仕事が増えるにつれて経営が安定した。第一原発では原子炉増設の気配もあった。「これからは原発だ」。心に決めた矢先だった。海岸から200メートルの距離にあった工場には津波が押し寄せた。機械は海水につきり、無事だった従業員も原発事故で避難を余儀なくされた。工場を再開したものの、事故後の原発では補修の仕事がもっぱら。会川たちの「ものづくり」の出番はなかった。

原発の次を探し求めている。2013年10月、会川はドイツ北部の港町、ブレーマーハーフェンにいた。港には長さ100メートルの支柱が積み重ねられ、部材を運ぶトラックが行き交う。造船業が廃れ、不況に陥った古い港町は、風力発電産業で再興した。うらやましい。まぶしかった。「これを手掛けた」。支柱を背に何枚も写真を撮った。

その後ドイツに何度も足を運び、人脈を広げた。だが、技術が結集する工場の扉は固い。行政の仲介で見学にこぎ着けた。やっと目にした機械と溶接の現場に、確信した。「うちの職人の技で十分にやれる」。支柱の自社生産という会川の挑戦を、とりまどめ役の職人、沼倉孝志(70)も支持した。石炭から石油、そして原発傾注と震災。工場が最年長の沼倉は、エネルギーに翻弄された会社の歩みを肌で知る。

溶接といっても、作るものが変われば勝手も違う。だからこそ、沼倉は「話を聞いてわくわくした」。昨年、会社は100本の支柱をつくり、風力発電の設備会社を通じて、海外に送り出した。風車の羽根も含めて発電設備の一式を自社で生産するのが夢だ。「風力発電で地元の産業が再興すれば、原発への依存から抜け出せる」。

新工場の完成にあわせて、今年、制服とヘルメットを新調する。敬称略(長谷文)

■ご意見は、keizai@asahi.comまで。